



民法證據編

大隈

1271



114
A2665



民法證據編目錄

第一部 證據

總則

第一章 判事ノ考覈

第一節 當事者申述ノ聽取、係

二、爭物并ニ證書外ノ書類ノ調

査及ヒ法律ノ解釋

第二節 臨檢

第三節 鑑定

第二章 直接證據

第一節 私書

第一款 私署證書

第二款 署名捺印セサル證書

至自

第八

十一

八

條條

至自

第六

十一

六

一

條條

至自

第七

十一

十

一

條條

至自

第九

十七

七

條條

至自

第十

十一

一

條條

至自

第十三

十三

三

條條

至自

第三

十三

三

條條

至自

第二十

二十

四

條條

至自

第二

十七

七

條條

至自

第三

十七

七

條條

大正十一年
六月
贈

第二章	口頭自白	至第	三	十五	條
第一節	裁判上ノ自白	至第	三	十四	條
第二款	裁判外ノ自白	至第	四	十五	條
第三款	公正證書	至第	四	十六	條
第四節	反對證書	至第	五	十七	條
第五節	追認證書	至第	五	十八	條
第六節	證書ノ謄本	至第	五	十九	條
第七節	證人ノ陳述	至第	六	二十	條
第八節	世評	第	七	二十三	條
第三章	間接證據	至第	七	二十四	條
第一節	法律上ノ推定	至第	八	二十五	條
第一款	公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定	至第	八	二十六	條

第二款	私益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定	第	八	十六	條
第三款	輕易ナル法律上ノ推定	第	八	十七	條
第二節	事實ノ推定	第	八	十八	條
第二部	時効	至第	八	十九	條
第一章	時効ノ性質及ヒ適用	至第	九	十九	條
第二章	時効ノ拋棄	至第	九	二十	條
第三章	時効ノ中斷	至第	十	二十一	條
第四章	時効ノ停止	至第	十	二十二	條
第五章	不動産ノ取得時効	至第	十	二十三	條
第六章	動産ノ取得時効	至第	十一	二十四	條
第七章	免責時効	至第	十一	二十五	條

第八章 特別ノ時効
附則

自第百五十四條
至第百六十四條

民法
證據編

第一部 證據

總則

第一條 有的又ハ無的ノ事實ヨリ利益ヲ得ンカ爲メ裁判上ニ
テ之ヲ主張スル者ハ其事實ヲ證スルコトヲ要ス

相手方ハ亦自己ニ對シテ證セラレタル事實ノ反對ヲ證シ或

ハ其事實ノ効力ヲ滅却セシムル事實トシテ主張スルモノヲ

證スルコトヲ要ス

第二條 自己ノ主張ノ全部又ハ一分ヲ法律ニ從ヒテ證セス又

ハ判事カ證據ヲ査定スル權ノ自由ナル場合ニ於テ判事ニ此

主張ノ心證ヲ起サシメサリシ原告若クハ被告ハ其證セサリ

シ點ニ付キ請求又ハ抗辯ニ於テ敗訴ス

第三條 當事者ノ一方ハ或ル事實ノ證據カ將來已レノ爲メニ利益アルキハ其利益ト證據喪失ノ危險トテ疏明シテ訴訟ノ起ラサル前ト雖モ其事實ノ證據ヲ舉クルヲ裁判上主トシテ請求スルヲ得

第四條 下ニ定メタル規則ハ物權、人權及ヒ人ノ身分ニ關スル證據ニ共通ノモノトス但特別ノ規定ヲ妨ケス

第五條 證據ハ左ノ諸件ヨリ成ル

第一 判事ノ考覈

第二 直接證據

第三 間接證據

第一章 判事ノ考覈

第六條 判事ハ左ノ諸件ニ依リ主張セラレタル事實ノ確實ヲ得タルキハ自己ノ考覈ニ依リテ爭ヲ決スルヲ得

第一 當事者又ハ其代人ノ申述ノ聽取、係爭物并ニ證書外

ノ書類ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第二 臨檢

第三 鑑定

第一節 當事者申述ノ聽取、係爭物并ニ證書外ノ書類

ノ調査及ヒ法律ノ解釋

第七條 當事者ノ自白アル場合ノ外當事者又ハ其代人ノ申述

及ヒ說明ヨリ請求若クハ抗辯ノ證セラレサルヲ又ハ尙ホ早

キトノ顯ハルルニ於テハ判事ハ其請求若クハ抗辯ヲ棄却シ

又ハ他日本案ノ判決ヲ爲ス可キ旨ヲ言渡ス

右判事ノ心證カ係爭物及ヒ證書外ノ書類ノ調査ヨリ生スル

キモ亦同シ

第八條 受ケタル損害若クハ失ヒタル利益其他原因ニ爭ナク

供給ス可キ價額ニ付キ爲ス可キ評價ノミニ争ノ存スル場合ニ於テ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ此評價ニ必要ナル元素ヲ得タルキハ自ラ其評價ヲ爲スヲ得

第九條 事實ニ争ナク法律ノ點ノミニ争ノ存スルキハ判事ハ當事者又ハ其代人ノ陳述ヲ聽キ法律ノ規定ヲ其精神ト明文トニ依リテ解釋シ且條理ト公道トノ普通原則ニ依リテ之ヲ補完シ自己ノ心證ヲ取ル

第二節 臨檢

第十條 境界、地役、占有、財産ノ損害及ヒ不動産工事ノ執行ニ關スル争其他此ニ類似ノ争ニ付テハ勿論裁判所ニ移送スルヲ得サル動産ノ形状ヲ證スルニ關スルキト雖モ判事ハ主張セラレタル事實ヲ直接ニ知ルヲ以テ訴訟事件ヲ明カナラシムルニ有益ナリト思考スルキハ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事

者ノ申立ニ因リテ係争物又ハ争ヲ決定ス可キ元素ノ存在スル場所ニ臨檢スルヲ得

第三節 鑑定

第十一條 法律ニ於テ鑑定ニ依ル可キ旨ヲ定メタル場合ノ外判事ハ争ノ判決ニ付キ特別ノ知識ヲ要スルキハ何時ニテモ或ハ職權ヲ以テ或ハ當事者ノ申立ニ因リテ自己ノ考覈ヲ助ケシムル爲メ鑑定人ノ報告ヲ爲ス可キ旨ヲ命スルヲ得判事ハ鑑定人總員一致ノ説ト雖モ之ニ從フ義務ナシ

第二章 直接證據

第十二條 左ノ諸件ニ於テハ人ノ證言ヨリ生スル直接ノ證據アリトス

第一 私書

第二 口頭自白

第三 公正證書

第四 證人ノ陳述

第一節 私書

第十三條 私書ノ證據力ハ其私書ノ對抗ヲ受クル當事者ノ之ニ署名シ又ハ捺印シタルト否トニ從ヒテ輕重アリ

第一款 私署證書

第十四條 私署證書ハ之ヲ以テ對抗セラルル者ニ不利ナル事實ノ陳述又ハ追認ヲ記載シ且其署名及ヒ印章又ハ其一アルキハ署名者捺印者ノ裁判外ノ自白即チ證言ヲ成スモノトス右同一ノ條件ヲ有スル書狀ハ私署證書ト同一ノ證據力ヲ有ス

第十五條 自己ノ利益ニ於テ私署證書ヲ有スル者カ或ル者チ其署名者ナリト主張シ又ハ思考スル場合ニ於テハ爭ノ生ス

ル前ト雖モ其者ニ對シ手跡署名及ヒ印章ノ追認ヲ請求スルコトヲ得
署名者ナリト主張セラレタル者ハ其手跡署名及ヒ印章ノ真正ナルコト又ハ其一ノ真正ナルコトヲ明確ニ追認シ又ハ否認スルコトヲ得ルノミ
裁判所ヨリ本條ノ規定ノ口諭ヲ受ケタル者否認ヲ爲ササルキハ裁判所ハ其否認セサルモノニ付テハ之ヲ追認シタリト認定スルコトヲ得

第十六條 印章ニ關シテハ其印章ヲ提示セラレタル者ハ其印章ノ自己ノ許諾ニテ之ヲ爲シタルヲ否認スルコトヲ得但總テノ方法ヲ以テ其證據ヲ供スルコトヲ要ス
此追認證書ヲ與フル前ニ右ノ異議ヲ留メサリシキハ其後ニ

至リ右ノ抗辯ヲ利唱スルヲ得ス
又其署名又ハ印章ヲ追認シタルキハ其署名又ハ印章ノ得ラ
レシ手段タル強暴、錯誤又ハ詐欺ヲ最早主張スルヲ得ス但
強暴カ既ニ止ミ又ハ錯誤若クハ詐欺ヲ既ニ發見シ且此事ニ
付キ何等ノ異議ヲモ留メシテ追認ヲ爲シタルキニ限ル
異議ヲ留メタルキハ追認證書ニ之ヲ記ス可シ
第十七條 署名者ナリト主張セラレタル者ノ相續人、承繼人又
ハ代人ニ對シテ追認ノ請求アリタルキハ被告ハ或ハ自己ノ
代表スル者ノ署名若クハ印章ヲ知ラサル旨或ハ其使用ノ不
確實ナル旨ヲ陳述スルニ止マルヲ得
右ノ相續人、承繼人又ハ代人ハ印章ノ不正當ナル押捺又ハ承
諾ノ瑕疵ヨリ生スル無効ノ方法ヲ利唱スル權利ヲ失ハス但
此事ニ關シ異議ヲ留ムルヲ怠リタルキト雖モ亦同シ

第十八條 被告ハ異議ヲ留メシテ署名又ハ印章ヲ追認シタ
リト雖モ後ニ捺印白紙ノ濫用又ハ署名若クハ印章ノ偽造ア
リタルヲ證スル權利ヲ失ハス
然レモ右ノ追認アリタルヲ知リ其證書ニ依リ善意ニテ約
定シタル第三者ニ證書無効ノ方法トシテ捺印白紙ノ濫用ヲ
以テ對抗スルヲ得ス
第十九條 一人又ハ數人ノ證人カ私署證書ニ加署シ又ハ加印
シタルキハ其證人ヲ手跡驗眞ニ召喚ス
第二十條 手跡、印章又ハ署名ノ驗眞ノ請求ニ關スル方式并ニ
期間及ヒ被告又ハ其代人ノ出席セサルニ因リ此等ノ者ニ於
テ印章又ハ署名ヲ追認シタリト爲スヲ得ヘキ場合ハ民事
訴訟法ニ於テ之ヲ定ム
署名者ナリト主張セラレタル者ノ明確ニ否認シ又ハ其相續

人若クハ承繼人ノ追認ヲ爲ササル場合ニ於ケル手跡驗眞手續ノ規則ニ付テモ亦同シ

第二十一條 雙務契約ヲ證スル私署證書ハ反對ノ利益ヲ有スル當事者間ニ正本二通ヲ作り且之ニ署名又ハ捺印スルヲ要ス

又各正本ニハ二通ヲ作りタル旨ヲ附記スルヲ要ス然レモ當事者ハ一通ノ證書ヲ作ルヲ得但其證書中指定シタル第三者ニ之ヲ寄託スルヲ台意シタルキニ限ル右ノ場合ニ於テ第三者ハ各當事者ノ求ニ應シテ其證書ヲ示ササル可カラズ但當事者雙方ノ承諾ナクシテ之ヲ交付スルヲ得ス

第二十二條 證書ノ錄製及ヒ其數ノ附記又ハ證書ノ寄託ハ當事者カ合意ノ組成ヲ繋ラシメタル條件ト看做ス

然レモ前條ニ從ヒテ證書ノ錄製アラサリシ契約ノ全部又ハ一分ヲ履行シタル當事者ハ最早條件ノ不履行ヲ利唱スルヲ得ス

第二十三條 片務契約ヲ證スル私署證書ニ金錢其他ノ定量物ヲ供與シ辨濟シ又ハ返還スル諾約ヲ包有スル場合ニ於テ債務者カ證書ノ本文ヲ自書セサルキハ債務者ハ其署名若クハ捺印ノ外尙ホ金額若クハ數量ノ文字ニ捺印スルヲ要ス但數人ノ債務者アルキハ其中ノ一人此捺印ヲ爲スヲ以テ足レリトス

第二十四條 二通ノ正本及ヒ前條ノ方式ハ商事ニ付テハ之ヲ要セス

第二十五條 前數條ノ方式ニ從ヒ錄製シタル私署證書ニシテ其對抗ヲ受クル者カ追認シ又ハ裁判上ニテ其者カ追認シタ

リト爲シタルモノハ其主文及ヒ之ト直接ノ關係ヲ有シ且之ヲ補完スル文言ニ付テハ其者ニ對シテ完全ナル證據トス此他ノ文言ハ書面ニ因ル證據端緒ノミニ之ヲ用ユルヲ得第三十八條ニ記載シタル自白不可分ナル原則ハ證書ノ各部分ニ之ヲ適用ス

第二十六條 證書カ第十八條ニ規定シタル如ク捺印白紙ノ濫用又ハ偽造ノ攻撃ヲ受ケタルキハ其證據力ハ刑事裁判所ニ被告ノ送致アルニ因リテ停止セラレ其裁判所ノ判決ノ確定ト爲ルマテ民事ノ判決ヲ中止ス嫌疑アル人ノ死亡其他ノ原因ニ由リテ刑事審問ノ開カレサリシキハ民事裁判所ハ刑事不受理ノ理由ニ付キ裁判アルマテ本案ノ判決ヲ中止ス又刑事審問中ナルキハ民事裁判所ハ當事者ノ要求ニ因リ又

ハ職權ヲ以テ其判決ヲ中止スルヲ得

第二款 署名捺印セサル證書

第二十七條 商人ノ帳簿ハ總テノ人ノ爲メ其商人ニ對シテ證據ヲ爲ス然レモ其帳簿ヲ援用スル者ハ此ヨリ生スル自白ヲ分ツコトヲ得ス

此他右帳簿ノ證據力ハ商法ニ於テ之ヲ規定ス

第二十八條 非商人ノ帳簿、覺書及ヒ家内ノ書類ハ其者ノ爲メ證據ヲ爲サス

右ノ帳簿、覺書及ヒ家内ノ書類ハ其者ニ對シ下ノ區別ニ從ヒテ證據ヲ爲ス

第二十九條 債權者ノ書面ハ左ノ場合ニ於テハ債務者ノ爲メ其債權者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第一 債務者ノ辨濟其他ノ免責ヲ明カニ掲クルキ但債權

者ニ於テ債務者ニ交付スル爲メ準備セル受取證書タル
ヲテ證スルキハ此限ニ在ラス

第二 債務者ノ證書又ハ從來ノ受取證書ニ免責ヲ書込ミ
且其書類カ債務者ノ手ニ存スルキ

第三十條 債務者ノ書面ニ其義務ヲ掲ケ且之ヲ以テ債權者ノ
證書ノ用ニ供スルモノタルヲ記載スルキハ其書面ハ債務
者ニ對シテ證據ヲ爲ス

第三十一條 前二條ノ場合ニ於テ抹殺シタル書面ハ之ヲ斟酌
セス但其抹殺カ詐害又ハ錯誤ニ出テタルヲ證アルキハ此
限ニ在ラス

第三十二條 非商人ハ裁判上ニテ其家内ノ帳簿及ヒ書類ヲ差
出タス義務ナシ然レモ任意ニテ之ヲ差出シタルキハ争ニ
關スルモノヲ抄録シタル後ニ非サレハ之ヲ取戻スヲ得ス

但抄録ヲ爲スニハ其者ノ出席ノ上又ハ之ヲ合式ニ召喚シタ
ルキニ限ル

第三十八條 第二節 口頭自白
第三十三條 口頭自白ハ一方ノ當事者カ己レニ不利ナル權利
上ノ結果ヲ生スルコト有ル可キ事實ニ付キ爲スモノナリ其自
白ハ裁判上ノモノ有リ裁判外ノモノ有リ

第三十四條 裁判上ノ自白ハ自發ノモノ有リ又ハ民事訴訟法
ニ規定シタル本人訊問ニ因リテ爲スモノ有リ

第三十五條 自白ハ其自白ニ繋ル權利ヲ處分スル能力ヲ有ス
ル者ニ非サレハ有効ニ之ヲ爲スヲ得ス但法律上自白ノ證
據ヲ禁シタル事實ニ非サルキニ限ル

代理人ノ爲シタル自白ハ其管理所爲ニ關スル外特別ノ委任

ニ依リタルキニ非サレハ有効ナラス但裁判上ノ代人ノ自白
ト其陳述取消ノ方式及ヒ條件トニ關スル民事訴訟法ノ規定
ヲ妨ケス

第三十六條 前條ニ從ヒテ爲シタル自白ヲ相手方ノ受諾シ又
ハ之ヲ裁判所ニ於テ認メタルキハ其自白ハ之ヲ爲シタル者
ニ對シテ完全ノ證據ヲ爲ス

然レモ其自白ハ事實ノ錯誤ノ爲メニ之ヲ言消スコトヲ得
第三十七條 自白ハ法律ノ錯誤ノ爲メ之ヲ言消スコトヲ得ス
然レモ相手方ノ權利ヲ直接又ハ間接ニ追認シタル者ハ其權

利ノ原因及ヒ存續ヲ爭フ權能ヲ失ハス
第三十八條 複雑ナル自白ヲ援用セント欲スル者ハ陳述セラ
レタル數箇ノ事實ニ關シ其自白ヲ分ツコトヲ得ス但此等ノ事
實カ相牽連シタルキニ限ル

然レモ主タル事實ヲ變更スル事實ノ主張ハ通常ノ證據方法
ヲ以テ之ヲ駁撃スルコトヲ得

第三十九條 裁判上ノ自白ノ効力ハ裁判所ノ管轄違カ公ノ秩
序ニ關セサルモノタルキハ其管轄違ニ因リテ無効ト爲ラス
反對ノ場合ニ於テハ自白ハ裁判外ノモノトシテノミ有効ナ

第四十條 一方ノ當事者カ訴訟事件ノ或ル事實ノ存在ニ付キ
陳述ス可キノ求テ受ケテ其事實ヲ爭ハサルニ因リ之ヲ追認
シタリト看做ス場合ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十一條 一方ノ當事者カ癡疾其他ノ原因ニ由リテ語ルコ
トヲ得スト雖モ書面又ハ容態ヲ以テ裁判所ニ答フルコトヲ得ル
ニ於テハ裁判上ノ自白ノ規則ヲ之ニ適用ス

第四十二條 裁判外ノ自白ハ相手方又ハ其代人ノ面前ニ於テ口頭ニテ又ハ此等ノ者ニ送付シタル信書若クハ書類ニテ之ヲ爲シタルニ非サレハ其効ヲ有セス
此末ノ場合ノ外口頭ノ自白ヲ受ケ及ヒ證スル資格ヲ有スル官廳ニ於テ更ニ其自白ヲ爲ササリシキハ人證ヲ許ス場合ニ非サレハ證人ヲ以テ之ヲ證スルヲ得ス

第四十三條 裁判上ノ自白ノ有効ナル爲メ要スル能力其證據力其言消及ヒ其不可分ニ關スル前數條ノ規定ハ裁判外ノ自白ニ之ヲ適用ス
然レモ判事ハ確實ニシテ明白ナル自白ニ非サレハ之ヲ採用スルヲ得ス

第四十四條 前記ノ規定ハ義務ノ全部又ハ一分ノ履行ヲ法律上ニテ默示ノ自白ト看做ス可キ場合ヲ妨ケス

第四十五條 裁判外ノ自白ハ有効ニ之ヲ言消シタリト雖モ相手方ノ利益ニ於テ時効ノ中斷ヲ生ス然レモ自白ノ日以後ニ經過ス可キ時効ハ言消ノ日ヨリ再ヒ進行ス

第三節 公正證書

第四十六條 公正證書ハ公吏カ當事者ヨリ證スルヲ託セラレタル事實ニ付テノ證言ナリ
又國又ハ官廳ノ代人トシテ事ヲ行フ官吏ノ録製シタル證書ハ公正ナリ
證書ハ公吏カ場所證書ノ性質及ヒ其證書ニ關係スル人ニ付キ管轄ヲ有シ且法律ニ定メタル方式ニ從ヒテ之ヲ作りタルニ非サレハ公正ナラス
公證人其他當事者ノ囑託ニ應ス可キ公吏ノ管轄及ヒ其證書ノ方式ハ特別法及ヒ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四十七條 前條ニ從ヒテ作りタル證書ハ偽造ノ申立アルマテハ公吏自身ニテ又ハ其面前ニテ爲シタル行爲及ヒ申述ニ付キ其吏員ノ陳述ノ證據ヲ爲ス

此證書ハ之ニ記載シタル日附ニ付キ右同一ノ證據ヲ爲ス公吏ノ名ニテ作り且其署名及ヒ印章ヲ具ヘタル證書ハ偽造ノ申立アルマテハ其吏員ヨリ出テタルモノト推定ス

偽造申立手續ハ民事訴訟法ニ於テ之ヲ規定ス

第四十八條 公正證書ノ證據力ハ偽造ノ申立ニ因リテ之ヲ停止ス其執行力ニ付テモ亦同シ
主文ト直接又ハ間接ノ關係アル文言ニ關シテハ第二十五條ノ規定ヲ適用ス

第四十九條 證書ニ公正證書トシテ有効ナル爲メ上ニ定メタル條件ノ一ヲ缺ク有ルモ出捐ヲ爲ス總テノ當事者カ現實

ニ之ニ署名シ又ハ捺印シタルキハ其證書ハ第二十一條及ヒ第二十三條ニ定メタル條件ヲ履行セスト雖モ私署證書トシテ有効ナリ

第四節 反對證書

第五十條 當事者ハ秘密ニ存シ置ク可キ反對證書ヲ以テ公正證書又ハ私署證書ノ効力ノ全部又ハ一分ヲ變更シ又ハ滅却スルヲ得然レモ其反對證書ハ公正證書タルキト雖モ署名者及ヒ其相續人ニ對スルニ非サレハ効力ヲ有セス
然レモ當事者ノ債權者及ヒ特定承繼人カ當事者ト約定スルニ當リ反對證書アルヲ知リタルヲ證スルニ於テハ之ヲ以テ其債權者及ヒ承繼人ニ對抗スルヲ得

第五十一條 不動產權利ニ關スル反對證書カ或ハ登記ニ因リ或ハ其附記ニ因リテ公ニ爲サレタルキハ其反對證書ハ通常

證書ノ効力ヲ取得ス但總テ遡及ノ効力ヲ有セス
第五十二條 孰レノ場合ニ於テモ一方ノ當事者ノ總テノ承繼
人ハ他ノ當事者及ヒ其相續人ニ反對證書ヲ以テ對抗スルコ
ト得

第五節 追認證書

第五十三條 追認證書ハ當事者ノ一方カ己レニ不利ナル公正
又ハ私署ノ原證書ノ成立ヲ追認スル證書ナリ
右ノ證書ハ下ノ二箇ノ場合ヲ除キ原告ヲシテ原證書ヲ差出
タス義務ヲ免カレシメス又其證書中ニ原證書ヨリ更ニ多ク
又ハ更ニ少キ事項ヲ記シ又ハ之ト異ナリタル事項ヲ記スル
モノハ其効ナシ但追認證書中ニ之ヲ原證書ニ代用ス可キ旨
ヲ記載シタルキハ此限ニ在ラス
第五十四條 左ノ二箇ノ場合ニ於テハ追認證書ハ原證書喪失

ノ證アルキ之ニ代ハルモノトス其原本ハ若シモ
第一 追認證書ニ原證書ノ事項ヲ再掲シタル旨ヲ記載ス
ルキ

第二 追認證書ノ日附ヨリ二十年ヲ經過シ且之ヲ援用
スル者カ其證書ノミヲ既ニ權利ノ行使ニ用井タルキ

第五十五條 前記ノ場合ノ外原告カ原證書ヲ差出タスコトヲ得
サルキハ追認證書ハ其利益ニ於テハ書面ニ因ル證據端緒ト
シテ有効ナリ
總テノ場合ニ於テ追認證書ハ時効ヲ中斷ス

第六節 證書ノ謄本
第五十六條 裁判所又ハ當事者ヨリ正本ノ差出ヲ求ムルニ於
テハ證書ノ謄本ハ之ヲ援用スル者ヲシテ其正本ヲ差出タス
義務ヲ免カレシメス但其者カ正本ノ滅失ヲ證シタルキハ此

限ニ在ラス

然レモ公正ノ正本又ハ裁判上追認アリタル私署ノ正本カ原本トシテ公吏ノ許ニ藏メラレタル場合ニ於テ裁判所ニ其正本ヲ差出タスコトハ裁判所ノ命令ニ依リ民事訴訟法及ヒ公吏ノ規則ニ從ヒテ之ヲ爲ス

第五十七條 正本ノ滅失シタルキ其謄本ハ左ノ四箇ノ場合ニ於テハ正本ト同一ノ證據力ヲ有ス

第一 公吏ノ作りシ公正證書ノ正式謄本タルキ

第二 公正證書ノ謄本又ハ裁判上追認アリ且原本トシテ

公吏ノ許ニ藏メタル私署證書ノ謄本ヲ當事者ノ要求ニ

因リ其相手方ノ面前ニテ其公吏ノ作りタルキ

第三 當事者出席ノ上又ハ合式ニ之ヲ召喚シタル上ニテ公吏カ裁判所ノ命ニ依リテ其謄本ヲ作りタルキ

第四 右三箇ノ場合ノ外適法ニ正本ヲ預リタル公吏ノ作

リシ謄本カ異議ヲ受ケスシテ其日附ヨリ二十个年ヲ經

過シ且當事者間ニ於テ主張セラレタル權利ニ關シ裁判

上又ハ裁判外ニテ既ニ援用セラレタルキ

謄本ニハ左ノ諸件ヲ附記スルコトヲ要ス

右第一ノ場合ニ於テハ其謄本ハ正式謄本タルコト

第二ノ場合ニ於テハ當事者ノ面前ニテ作りタルコト

第三ノ場合ニ於テハ裁判所ノ命ニ依リテ作りタルコト

總テノ場合ニ於テ其謄本ヲ正本ト校合シタル旨又ハ其謄本

ノ正本ニ符合スル旨ヲ之ニ附記スルコトヲ要ス

第五十八條 前條ニ記載シタル四箇ノ場合ノ外ハ公吏ノ作り

タル證書ノ謄本ハ書面ニ因ル證據端緒ノ用ヲ爲スノミ

第五十九條 公吏ノ作りタル謄本ノ復寫ハ人證ヲ許ス可キ場

合ニ限り單純ナル參考書ノ用ヲ爲スノミ
然レモ公正證書ノ謄本ヲ登記ノ公簿ニ謄寫シタルキハ其謄
寫ハ書面ニ因ル證據端緒ナリ
裁判上追認アリタル私署證書ノ正本ノ右ニ同シキ謄寫ハ亦
書面ニ因ル證據端緒ノ効力ヲ有ス
謄寫カ其日附ヨリ二十年ヲ經過シ且異議ヲ受クルト無ク
既ニ行使セラレタルキハ其謄寫ハ第五十七條第四號ニ從ヒ
テ完全ノ證據トス

第七節 證人ノ陳述

第六十條 物權又ハ人權ヲ創設シ、移轉シ、變更シ又ハ消滅セシ
ムル性質アル總テノ所爲ニ付テハ其所爲ヨリ各當事者又ハ
其一方ノ爲メニ生スル利益カ當時五十圓ノ價額ヲ超過スル
キハ公正證書又ハ私署證書ヲ作ルト要ス

人證ハ右ノ價額ヲ超過スルニ於テハ法律上明示若クハ默示
ニテ例外ト爲シタルキニ非サレハ裁判所之ヲ受理セス

第六十一條 雙務契約ニ於ケル證書ノ必要ハ權利ノ最高ナル
價額ニ依ル

第六十二條 請求又ハ抗辯ノ目的カ金錢ニ非サル場合ニ於テ
相手方カ爭ノ價額五十圓ヲ超過スル旨ヲ陳述シテ人證ニ異
議ヲ申立ツルキハ裁判所ハ訴訟ノ元素ニ從ヒ又ハ鑑定ニ從
ヒテ豫メ假ノ評價ヲ爲ス

第六十三條 書面ヲ作りタル場合ニ於テハ書面ニ反スル事項
若クハ書面外ノ事項ヲ證スル爲メ又ハ書面ノ意義ヲ變更ス
可キ様其錄製ノ際若クハ其前後ニ申述シタルモノヲ證スル
爲メニハ縱令五十圓ヨリ少ナキ利益ニ關スルモ人證ヲ許サ
ス

此禁止ハ辨濟免除、更改其他ノ義務消滅ノ原因ヲ證スル爲メ
又ハ書面ヲ以テ證シタル物權ノ消滅又ハ變更ヲ證スル爲メ
上ニ定メタル制限内ニ於ケル人證ヲ妨ケス
總テノ場合ニ於テ主張セラレタル事實ノ日附及ヒ場所又ハ
履行ノ爲メ口頭ニテ定メタル時期及ヒ場所ノ脱漏ハ人證ヲ
以テ之ヲ補足スルコトヲ得但此事ヨリ生スル利益ヲ主タル利
益ニ加ヘテ價額五十圓ヲ超過セサルキニ限ル
第六十四條 争ノ利益カ五十圓ヲ超過スル場合ニ於テハ原告
又ハ被告ハ縱令其以下ノ數額ニ請求又ハ抗辯ヲ減スルモ人
證ヲ許サス
五十圓ヲ超過セサル請求又ハ抗辯カ此數額ヲ超過シタル價
額ノ殘餘ナルキ亦同シ
第六十五條 前條ニ規定シタル二箇ノ場合ニ於テ證人訊問ニ

因リ五十圓ヲ超過シタル利益ナルコトヲ發見シタルキハ人證
ヲ許シタル裁判所ハ之ヲ取消スコトヲ要ス
此他證人訊問ニ因リ法律上之ヲ許ササル事情ヲ發見シタル
場合ニ於テモ亦同シ
第六十六條 前記ノ規定ハ填補利息過怠約款又ハ契約ニ從ヒ
テ返還ヲ受ク可キ果實ノ計算ヲ加フルカ爲メニ五十圓ノ額
ヲ超過スル場合ニ於テ原告又ハ被告カ證人ヲ以テ其主タル
債權ヲ證スル爲メ此從タル債權ヲ拋棄シ得ル妨ト爲ラス
右ノ超過カ遅延利息又ハ要約セサル損害賠償又ハ請求後ニ
返還ヲ受ク可キ果實ノミヨリ生スルキハ全部ニ付キ人證ヲ
許ス
第六十七條 書面ニ依リ全ク證セラレスシテ各別ニ人證ノ許
サル可キ數箇ノ請求ヲ爲スコトヲ得ヘキ者ハ其原因ノ如何ニ

拘ハラス一箇ノ訴狀ニ其數箇ノ請求ヲ併合スルヲ要ス但其請求カ總テ滿期ノモノニシテ同一裁判所ノ管轄ニ屬スルモノタルキニ限ル
 右ノ手續ヲ爲ササルニ於テハ最早其脫漏シタル請求ニ付キ人證ヲ許サス
 右ノ規定ハ同一ノ請求ニ對シ數箇ノ抗辯ヲ以テ對抗セント主張スル者ニ之ヲ適用ス
 第六十八條 前條ニ記載シタル如ク併合シタル數箇ノ請求又ハ抗辯カ五十圓ノ價額ヲ超過スルキハ人證ヲ許サス但此請求又ハ抗辯カ相異ナル原因ヨリ生スルキハ此限ニ在ラス
 第六十九條 左ノ場合ニ於テハ爭ノ價額ノ如何ニ拘ハラス人證ヲ許ス
 第一 書面ニ因ル證據端緒ノ存スルキ

證據端緒トハ之ヲ以テ對抗セラルル人又ハ其人ヲ代表シタル者ヨリ出テタル總テノ書面ニシテ主張シタル事柄ニ付キ事實タルノ感ヲ起サシムルモノヲ謂フ
 主張シタル事柄ノ書面ニ因ル證據端緒アルキハ書面外ノ事項又ハ書面ニ反スル事項ニ付キ人證ヲ許ス
 第二 原告又ハ被告カ不可抗力ニ因リ又ハ自己ノ過失若クハ懈怠ニ歸ス可カラサル意外ノ事ニ因リテ其證書ヲ失ヒタルヲ證スルキ
 第三 主張シタル事柄ノ有リタル當時利害關係人カ書證ヲ得ル能ハサリシキ
 第七十條 前條第三號ハ殊ニ左ノ場合ニ之ヲ適用ス
 財産取得編第二百二十條及ヒ第二百二十一條第一項ニ規定シタル急迫寄託

事變、不期ノ危険又ハ急迫ナル必要ノ場合ニ於テ負擔シタル義務

合意外ノ原因ヲ有スル義務但此場合ニ於テ不當ノ利得不正ノ損害又ハ法律ノ規定ヨリ生シタリト主張スル義務カ書面ヲ以テ證ス可キ性質ノモノタル權利行爲ヲ推量セシムルキハ豫メ其證據ヲ供スルヲ要ス

第七十一條 法律カ人證ヲ許ス場合ノ外人證ヲ拒ムニ利益ヲ有スル當事者カ人證ニ依リテ證據ヲ舉クルヲ承諾スルキハ裁判所ハ人證ヲ拒絕シ又ハ之ヲ許可スルヲ得

七十二條 判事ハ證人ノ證據ニ因リテ拘束セラレス其心證ニ從ヒテ判決ス

第八節 世評
第七十三條 法律上特ニ世評ニ因ル證據ヲ許ス場合ノ外或ル

事實カ顯著ナルキ法律カ其規定ヲ此事實ニ適用ス可キヲ決定メタル各箇ノ場合ニ於テハ此證ヲ用ユルヲ得
世評ニ因ル證據ニ於テハ證人ハ事實ニ付キ直接ニ自ラ知ラサルモ傳聞ニ因リ又ハ公然顯著ナルニ因リテ知リタル所ノモノヲ陳述スルヲ得

第三章 間接證據

第七十四條 間接證據ナル推定ハ法律カ直接證據ナキ場合ニ於テ知レタル事實ヨリ知レサル事實ニ自ラ推及シ又ハ裁判官ノ明識ト思慮トニ委ヌル結果ナリ
右第一ノ推定ヲ法律上ノ推定ト謂ヒ第二ノ推定ヲ事實ノ推定ト謂フ

第一節 法律上ノ推定

第七十五條 法律上ノ推定ニハ其證據力ト其原因トニ從ヒテ

左ノ區別アリ

第一 完全ニシテ公益ニ關スルモノ

第二 完全ニシテ私益ニ關スルモノ

第三 輕易ナルモノ

第一款 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第七十六條 公益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス此推定ハ左ノ如シ

第一 既判力

第二 取得又ハ免責ノ時効

第七十七條 既判力ハ判決主文ニ包含スルモノニ存ス

第七十八條 既判力ハ真正ト推定セラル

然レモ確定ト爲ラサル判決ハ民事訴訟法ニ定メタル方式及

ヒ期間ニ於テ之ヲ攻撃スルヲ得

第七十九條 判決ノ確定ト爲リタルハ同一ノ争ヲ再ヒ訴フル

ニ於テハ其争ハ下ノ區別ニ從ヒ既判力ニ依リテ之ヲ斥ク

第八十條 判決カ全部又ハ一分ニ付キ公ノ秩序ニ關スルハ

既判力ニ因ル不受理ノ理由ハ裁判所ノ職權ヲ以テ之ヲ補足

スルヲ要ス

此他ノ場合ニ於テハ利害關係人ヨリ其不受理ノ理由ヲ以テ

對抗スルヲ要ス

第八十一條 既判力ニ因ル不受理ノ理由ヲ以テ新請求又ハ新

答辯ニ對抗スルヲ得ルニハ其請求又ハ答辯カ舊請求又ハ

舊答辯ニ比較シテ左ノ諸件アルヲ要ス

第一 權利又ハ事實ニ關シ争ノ目的ノ同一ナルヲ

第二 主張ノ原因ノ同一ナルヲ

第三 原告、被告ノ權利上ノ資格ノ同一ナルコト

第八十二條 新請求又ハ新答辯ノ目的カ數量ニ付テノミ舊請求又ハ舊答辯ノ目的ト異ナリタルキハ新請求又ハ新答辯ノ目的ハ舊請求又ハ舊答辯ニ包含シタルモノト看做ス但舊請求又ハ舊答辯ヲ裁判セシ裁判所カ新請求又ハ新答辯ノ數量ヲ正當トスルニ於テハ之ヲ許與スル權力ヲ有セシキニ限ル

第八十三條 舊爭カ合意又ハ遺言ノ銷除、廢罷又ハ解除ヲ目的トシタルキハ其爭ノ際存在シタルモ當事者ノ知リテ申立テサリシ他ノ同性質ノ原因ハ當事者之ヲ拋棄シタリト推定セラレ更ニ之ヲ新爭ノ原因トシテ用エルコトヲ得ス

方式ノ瑕疵アル證書ヲ其瑕疵ノ爲メ無効トスル舊爭中ニ申立テサリシ他ノ方式ノ瑕疵ニ付テモ亦同シ

本條ノ適用ニ於テ銷除ノ訴ノ爲メニハ承諾ノ各種ノ瑕疵及

七各種ノ無能力ヲ同性質ノ原因ト看做シ又解除ノ訴ノ爲メニハ合意不履行ノ各種ノ場合ヲ同性質ノ原因ト看做ス

第八十四條 當事者カ或ハ自身ニテ同一ノ資格ヲ以テ既ニ舊訴訟ニ出テタルキ或ハ舊訴訟ニ於テ其前主若クハ代理人ニ因リテ代表セラレタルキ或ハ利害關係人ノ結合カ暗ニ相互代理タルキハ當事者ノ權利上ノ資格ハ同一ナリトス

第八十五條 刑事裁判所カ犯罪ノ所爲ノ爲メニ要求セシ民事上ノ賠償ニ付キ判決シタル場合ノ外尙ホ重罪、輕罪又ハ違警罪ノ判決ハ犯罪ニ附着スル民事上ノ利益ニ付キ既判力ヲ有ス但犯罪所爲ノ眞實、其犯罪ノ性質及ヒ被告人ノ罪責ニ付テノ裁判ニ關スルモノニ限ル

第二款 利益ニ關スル完全ナル法律上ノ推定

第八十六條 法律上ノ推定ハ左ノ場合ニ於テハ利益ニ關スル

完全ノモノタリ

第一 法律カ人ノ身分ニ關スル或ル資格ヲ付與シ又ハ拒絶スルキ

第二 法律カ或ル所爲ヲ其規定ニ背キタルモノト推定シテ取消スルキ

第三 法律カ制規ノ公示ナキニ因リ第三者ニ知レサルモノト推定シテ或ル權利ノ行使ヲ拒絶スルキ

此法律上ノ推定ハ法律ノ明示シテ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス

然レモ和解ヲ許ス場合ニ於テハ此推定ハ口頭自白ヲ以テ何時ニテモ之ヲ覆ヘスヲ得

第八十七條 第三款 輕易ナル法律上ノ推定ニ非サルモノハ輕易ナル法律上ノ推定ニ付テハ法律カ反對ノ證據ヲ明許セ

律上ノ推定ナリ此推定ニ付テハ法律カ反對ノ證據ヲ明許セサルキト雖モ總テ之ヲ許ス

右反對ノ證據ハ前二章ニ規定シタル條件ヲ以テスルニ非サレハ之ヲ舉クルヲ得ス

又輕易ナル法律上ノ推定ハ次條ノ場合ニ於テハ事實ノ推定ヲ以テ之ヲ駁撃スルヲ得

第二節 事實ノ推定

第八十八條 法律カ裁判所ニ其裁判ノ元素ヲ訴訟ノ事情ニ付キ採取スルヲ許ス特別ナル場合ノ外尙ホ裁判所ハ人證ヲ許ス可キ場合ニ於テハ何等ノ直接ノ證據ヲモ舉ケサルキト雖モ事情ヨリ生スル心證ニ從ヒテ爭ヲ決スルヲ得

第九十條 正當ナル取得又ハ免責ノ推定ハ完全ニシテ公ノ秩序ニ關スルモノトス此推定ハ第九十六條及ヒ第六十一條ニ規定シタル如ク法律ノ定メタル場合及ヒ方法ニ從フニ非サレハ反對ノ證據ヲ許サス

第二部 時効

第一章 時効ノ性質及ヒ適用ノ人

第八十九條 時効ハ時ノ効力ト法律ニ定メタル其他ノ條件トヲ以テスル取得又ハ免責ノ法律上ノ推定ナリ但動産ノ瞬間時効ニ關スル第四百四十四條以下ノ規定ヲ妨ケス

第九十一條 取得時効ノ効力ハ占有ノ有益ニ始マリタル日ニ遡ル

免責時効ノ効力ハ債權者カ其權利ヲ第二百二十五條以下ニ記載シタル區別ニ從ヒテ行フヲ得ヘカリシ日ニ遡ル

第九十二條 或ル訴權ノ行使ノ爲メ法律ニ定メタル期間ハ其
訴權ノ性質ニ因リテ取得時効又ハ免責時効ノ一般ノ規則ニ
從フ但法律カ明示又ハ默示ニテ例外ヲ設ケタル場合ハ此限
ニ在ラス

第九十三條 時効ハ總テノ人ヨリ之ヲ援用スルヲ得
又時効ハ總テノ人ニ對シテ進行ス但法律ニ依リ時効停止ノ
利益ヲ受クル人ニ對シテハ此限ニ在ラス

第九十四條 總テ融通物ハ時効ニ罹ルヲ得但法律上之ニ異
ナル規定ヲ設ケタルモノハ此限ニ在ラス
不融通物及ヒ讓渡スヲ得サル物ハ時効ニ罹ルヲ得ス
公有ノ財産ハ動産ト雖モ亦同シ

第九十五條 自己ノ財産ニ付キ又ハ他人ニ對シテ行フヲ得
ル法律上ノ權能ハ幾許ノ時期間之ヲ行ハサルモ爲メニ喪失

セス但法律合意又ハ遺言ニ於テ之ニ異ナル定メヲ設ケタル
場合ハ此限ニ在ラス

第九十六條 判事ハ職權ヲ以テ時効ヨリ生スル請求又ハ抗辯
ノ方法ヲ補足スルヲ得時効ハ其條件ノ成就シタルカ爲
メ利益ヲ受クル者ヨリ之ヲ援用スルヲ要ス

時効ヲ援用スル當時併セテ正當ノ取得又ハ免責ナキヲ追
認スル者ハ時効ヲ拋棄シタリト看做ス

第九十七條 時効ヲ援用スルニ利益ヲ有スル當事者ノ總テノ
承繼人ハ或ハ原告ト爲リ或ハ被告ト爲リ其當事者ノ權ニ基
キテ時効ヲ援用スルヲ得

債權者ハ財産編第三百三十九條ニ從ヒテ右ト同一ノ權利ヲ
有ス
第九十八條 時効ハ訴訟中何時ニテモ之ヲ援用スルヲ得又

控訴ニ於テモ始メテ之ヲ援用スルヲ得然レモ上告ニ於テハ始メテ之ヲ援用スルヲ得ス

第九十九條 年又ハ月ニ依リテ成就ス可キ時効ハ曆ニ從ヒテ之ヲ算ス

日ニ依リテ成就ス可キ時効ハ午前零時ヨリ午後十二時マテヲ一日ト爲シテ之ヲ算ス

時効ノ進行ノ始マリタル日又ハ其中斷若クハ停止ノ後再ヒ進行ノ始マリタル日ハ之ヲ算セス

最後ノ日ハ全ク經過スルヲ要ス

第二章 時効ノ拋棄

第一百條 時効ハ豫メ之ヲ拋棄スルヲ得ス但第二百十條第二項ニ記スル如ク占有者カ將來ニ向ヒテ其占有ノ容假ヲ認ムル權利ニ妨ナシ

成就シタル時効ハ之ヲ拋棄スルヲ得又其進行中ト雖モ既

ニ經過シタル時期ノ利益ハ之ヲ拋棄スルヲ得

此場合ニ於テハ第一百十八條以下ニ記載セル相手方ノ權利ヲ追認シタル場合ニ於ケルト同シク時効ハ中斷ス

第一百一條 拋棄ハ默示タルヲ得ルト雖モ明カニ事情ヨリ顯ハルルヲ要ス

第一百二條 成就シタル時効ヲ有効ニ拋棄スルニハ取得シタリト推定セララル權利ヲ無償ニテ讓渡シ又ハ消滅シタリト推定セララル義務ヲ無償ニテ負擔スル能力アルヲ要ス

第一百三條 債權者ハ其權利ヲ詐害シテ債務者ノ爲シタル時効

ノ拋棄ニ對シテハ財産編第三百四十條以下ニ定メタル條件及ヒ方法ニ從ヒ自己ノ名ヲ以テ之ヲ攻撃スルヲ得

第四百四條 經過シタル時期ノ利益カ下ニ記シタル原因ノ一ニ由リテ消滅スルキハ時効ハ中斷ス

中斷シタル時効ハ中斷ノ原因ノ止ミシ時ヨリ更ニ進行ス

第四百五條 時効ノ中斷ハ自然ノモノ有リ法定ノモノ有リ自然ノ中斷ハ取得時効ニ關シテノミ生ス

法定ノ中斷ハ取得及ヒ免責ノ時効ニ共通ナリ

第四百六條 動産不動産又ハ包括動産ノ占有者カ眞ノ所有者又ハ第三者ノ所爲ニ因リテ一年以上其占有ヲ奪ハレタルキハ自然ノ中斷アリ

占有ヲ取戻シタルキハ時効ハ更ニ進行ス

若シ不可抗力ニ因リテ占有ヲ奪ハレタルキハ自然ノ中斷ナシ

第四百七條 自然ノ中斷ハ各利害關係人ノ爲メニ其効ヲ生ス

第四百八條 占有者カ或ル時間任意ニテ其占有ヲ止メシキハ其占有不繼續ノ効力ハ第三百三十九條ニ於テ之ヲ規定ス

第四百九條 法定ノ中斷ハ左ノ諸件ヨリ生ス

第一 裁判上ノ請求

第二 勸解上ノ召喚又ハ任意出席

第三 執行文提示又ハ催告

第四 差押

第五 任意ノ追認

右ノ手續又ハ追認ノ行爲カ時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ權利ニ明カニ關係スルヲ要ス

第一百十條 法定ノ中斷ハ中斷ノ所爲ヲ行ヒタル者及ヒ其承繼人ノ爲メニ非サレハ其効ヲ生セス

第一百十一條 本訴ト附帶訴ト反訴トヲ間ハス裁判上ノ請求ハ

時効ヲ中斷ス但其請求カ方式ニ於テ無効タルキ又ハ管轄違
ノ裁判所ニ之ヲ爲シタルキモ亦同シ
然レモ右但書ノ場合ニ於テ中斷ハ初ノ請求ヲ棄却セシ判決
アリタル時ヨリ二个月内ニ更ニ合式ノ訴ヲ提起セサルニ於
テハ之ヲ不成立ト看做ス
第百十二條 中斷ハ左ノ場合ニ於テモ亦之ヲ不成立ト看做ス
第一 請求カ其基本ニ於テ棄却セラレタルキ
第二 原告カ取下ヲ爲シタルキ
第三 訴訟手續カ民事訴訟法ニ定メタル時間休止シテ無
効ト爲リタルキ
第百十三條 裁判上ノ請求ヨリ生スル中斷ハ訴訟ノ提起ヨリ
其判決ノ確定ト爲ルマテ繼續ス
第百十四條 勸解上ノ召喚又ハ任意出席ニ因ル時効ノ中斷ハ

主タル請求ハ勿論其反對ノ請求ヨリモ生スル間ヨリ主タル
召喚ノ無効ハ方式ノ瑕疵ニ因ルモ管轄違ニ因ルモ中斷ヲ妨
ケス但初ノ召喚ノ無効ト爲リタルヨリ一个月内ニ更ニ合式
ノ召喚ヲ爲スコトヲ要ス
合式ノ召喚ノ上勸解不調ノ場合及ヒ被告ノ缺席ノ場合ニ於
テ中斷ハ一个月内ニ裁判所ノ請求ヲ爲ササルキハ之ヲ不成
立ト看做ス
第百十五條 執行文提示ヨリ生スル中斷ハ一个年内ニ差押ヲ
爲ササルキハ之ヲ不成立ト看做ス
右ノ中斷ハ方式ノ瑕疵ニ因リテ其提示ノ無効ナルキト雖モ
尙ホ成立ス但催告ヨリ生スル中斷ノ爲メ下ニ定メタル條件
ヲ履行スルコトヲ要ス
第百十六條 義務履行ノ催告ハ義務ノ目的原因及ヒ債務者ヲ

明カニ指示シ且六个月内ニ裁判上又ハ勸解上ノ請求ヲ爲シタルキニ非サレハ時効ヲ中斷セス

第一百七七條 差押ヨリ生スル中斷ハ其差押ノ手續カ合式ニ終結マテ繼續シタルニ非サレハ其効力ヲ存續セス

假差押ハ裁判所ノ定メタル期間ニ裁判上ノ請求ヲ爲シタルニ非サレハ時効ヲ中斷セス

時効ノ利益ヲ受クル者ニ對シテ差押ヲ爲ササルキハ其差押ハ此者ニ告知シタル後ニ非サレハ之ニ對シテ中斷ノ効力ヲ有セス

第一百八條 任意ノ追認ヨリ生スル時効ノ中斷ハ裁判上ヨリ又ハ口頭タルト書面タルトヲ問ハス裁判外ノ行爲ヨリ生スルヲ得

裁判上ノ追認ハ自發ナルコト有リ又ハ判事ノ訊問ヨリ生スル

コト有リ

第一百十九條 追認ハ明示又ハ默示ナルコトヲ得

占有者カ占有物ニ關スル果實又ハ賠償ノ要求ニ承服スルキ又ハ之ニ反シテ占有者カ物ニ付キ爲シタル必要若クハ有益

ノ費用ノ爲メ賠償ヲ要求スルキハ殊ニ取得時効ニ對スル默示ノ追認アリトス

債務者カ利息又ハ債務ノ辨濟ノ請求ニ承服スルキ又ハ之ニ反シテ債務者カ提供ヲ爲シ若クハ恩惠期限ノ請求ヲ爲スルキハ殊ニ免責時効ニ對スル默示ノ追認アリトス

第二百十條 眞ノ所有者ノ權利ヲ追認シタル占有者ハ其所有者及ヒ其承繼人ニ對シ新時効ヲ再ヒ始ムル權利ヲ失ハス然

レモ占有者ハ最早其以前ノ善意ノ利益ヲ援用スルコトヲ得ス

若シ其占有者カ容假ノ占有者ト爲リタルキハ將來ニ向ヒ何

人ニ對シテモ時効ノ利益ヲ失フ但財産編第百八十五條第二
項及ヒ第三項ノ場合ノ適用ヲ妨ケス
第百二十一條 追認ニ因リテ中斷シタル免責時効ハ即時更ニ
進行ス然レモ其時効ハ最初短期ノモノタリシキト雖モ將來
ニ向ヒテハ長期時効ノ期間ニ從フ
第百二十二條 時効ヲ中斷スル追認ハ自己ノ財産ヲ管理スル
能力又ハ時効ニ罹ルコト有ル可キ財産ヲ他人ノ爲メニ管理ス
ル權力ヲ有スル者ニ於テ之ヲ爲シタルキハ有効ナリ
然レモ婦、無能力者又ハ委任者ノ利益ニ於ケル不動産ノ取得
時効ヲ中斷スル爲メ夫、後見人又ハ代理人ノ爲シタル追認ハ
不動産ノ請求ニ承服スル一般又ハ特別ノ權力アルニ非サレ
ハ有効ナラス
第百二十三條 時効ヲ中斷スル追認ノ所爲ニ付キ爭アルキハ

通常ノ證據方法ヲ以テ之ヲ證スルコトヲ得
第百二十四條 保證、連帶及ヒ不可分ノ場合ニ於テ各利害關係
人ニ對スル追認其他ノ方法ニ因ル時効中斷ノ効力ハ債權擔
保編第二十七條、第六十一條、第八十一條及ヒ第八十九條ニ於
テ之ヲ規定ス
第四章 時効ノ停止
第百二十五條 權利ノ行使カ權利上又ハ恩惠上ノ確定若クハ
不確定ノ期間ニ服シ又ハ其發生カ停止條件ニ繋ルキハ其期
間ノ滿了又ハ條件ノ成就ノ時ニ非サレハ時効ハ進行ヲ始メ
ス
第百二十六條 時効ハ物權又ハ人權ニシテ其成立、廣狹又ハ行
使カ相續ニ繋ルモノニ對シテハ其相續後ニ非サレハ進行ヲ
始メス

第二百二十七條 遺言又ハ前主ノ合意ニ對シ相續人ニ屬スル銷
除訴權又ハ抗辯ノ時効ハ其遺言又ハ合意ヲ相續人ニ對シテ
援用シ又ハ其相續人ヲ害スル權利行使ノ基礎トシテ用井タ
ル後ニ非サレハ進行ヲ始メス

第二百二十八條 前記ノ場合ニ於テ時効ハ第三所持者ニ對シテ
停止セス但所有權ノ取得時効又ハ抵當ノ消滅時効ヲ中斷セ
ント欲スル利害關係人ニ於テ自己ノ未定ノ權利ノ追認證書
ヲ得ント請求スルコト又ハ裁判上其權利ヲ單ニ追認セシムル
コトヲ妨ケス

第二百二十九條 時効カ其進行中ニ停止セラレルルホハ既ニ經過
シタル時間ハ其時効ノ更ニ進行ヲ始ムル時ニ之ヲ通算ス
第三百十條 時効ハ法律ニ定メタル人ノ利益ニ於ケルニ非サ
レハ停止セス

第三百十一條 合期間五個年以下ノ時効ハ成年者ニ對スル如ク
未成年者及ヒ禁治産者ニ對シテ進行ス但後見人カ此等ノ者
ノ權利ヲ行フコトヲ怠リ又ハ正當ノ原因ナクシテ此權利ヲ覺
知セサル場合ニ於テハ此等ノ者ヨリ其後見人ニ對スル求償
權ヲ妨ケス
五個年ヲ超ユル時効ニ關シテハ其期間ハ成年ニ達シタル未
成年者又ハ精神ノ回復シタル禁治産者ヲシテ常ニ其權利ヲ
行フ猶豫ヲ得セシムル爲メ最後ノ一個年停止ス
第三百十二條 時効ハ婦ニ對シ第三者ノ利益ニ於テ進行ス但
夫カ婦ノ爲メニ管理スル財産ニ關シ其夫ノ方ニ懈怠アル場
合ニ於テハ婦ヨリ夫ニ對スル求償權ヲ妨ケス
然レモ法律ニ規定シタル場合ニ於テハ時効ハ婦ノ爲メ最後
ノ一個年停止ス

第三百三十三條 前二條ノ規定ハ無能力者自身ニテ爲シタル行爲ノ銷除訴權ノ時効停止ニ關シ財産編第五百四十五條及ヒ第五百四十六條ニ定メタルモノヲ妨ケス

第三百三十四條 配偶者ノ一人ヨリ他ノ一人ニ對シテ行フ可キ權利ニ關シテハ婚姻中ト雖モ時効ハ進行ス

然レモ其時効ハ最後ノ一个年停止ス又一个年以下ノ時効ニ關シテハ其最後ノ半期間停止ス

第四百四十四條ノ場合ニ於テハ動産回復ノ期間ハ三个月トス

第三百三十五條 時効ハ財産ノ管理人ト其管理ヲ受クル者トノ間ニ於テ其保存スルヲ任セラレタル權利ニ付テハ管理人ノ爲メニ停止ス

時効ハ管理力止シ以後ニ非サレハ更ニ進行セス又第四百四十四條ノ場合ニ於ケル動産ノ時効ニ關シテハ三个月ヲ以テ

スルニ非サレハ成就セス

第三百三十六條 上ニ定メサル場合ニ於テ時効ノ期間ノ滿了スル時ニ當リ有權者カ交通ノ塞カリタルニ因リ又ハ地方ノ裁判事務ノ停止セラレタルニ因リテ其權利ノ効用ヲ致サシメ又ハ時効ヲ中斷スル爲メ手續ヲ爲スヲ能ハサリシ時ハ有權者其妨碍ノ止ム後直チニ請求ヲ爲スニ於テハ其失權ヲ免カサルヲ得

右ノ規定ハ陸海軍人カ内國又ハ外國ノ戰亂ノ時ニ於テ服役ノ爲メ其權利ヲ行フヲ妨ケラレタル場合ニ於テハ其利益ノ爲メ之ヲ適用ス

第三百三十七條 物權又ハ人權ノ不可分ヨリ生スル時効ノ停止ハ財産編第二百九十一條、第四百四十六條及ヒ債權擔保編第八十九條第二項ニ於テ之ヲ規定ス

第五章 不動産ノ取得時効

第三百二十八條 不動産ノ取得時効ニ付テハ所有者ノ名義ニテ占有シ其占有ハ繼續シテ中斷ナク且平穩公然ニシテ下ニ定メタル繼續期間アルヲ要ス

財産編第八十三條及ヒ第八十五條ニ定メタル如キ強暴、隱密又ハ容假ノ占有ハ時効ヲ生セス

第三百二十九條 占有者カ時効ニ因リテ取得セントスル物ニ付キ或ル長キ時間所有者ノ行爲ヲ爲スコヲ任意ニテ止メシキハ其占有ハ不繼續ニシテ時効ヲ生セス

占有者カ再ヒ所有者ノ行爲ヲ爲スキハ其以前ノ占有ノ時間ハ占有者ノ爲メニ之ヲ算セス

第四百十條 占有カ上ニ定メタル條件ノ外財産編第八十一條ニ記載シタル如キ正權原ニ基因シ且財産編第八十二條

ニ從ヒテ善意ナルキハ占有者ハ不動産ノ所在地ト時効ノ爲メ害ヲ受クル者ノ住所又ハ居所トノ間ノ距離ヲ區別セス十五个年ヲ以テ時効ヲ取得ス

占有者カ正權原ヲ證スルヲ得ヌ又ハ之ヲ證スルモ財産編第八十七條ニ規定シタル如ク其悪意カ證セラルルキハ取得時効ノ期間ハ三十个年トス

第四百十一條 性質上登記ヲ爲ス可キ正權原ニ基因シタル時効ハ其證書ニ依リ登記ヲ爲シタル後ニ非サレハ之ヲ算セス

第四百十二條 方式上無効タリ又ハ裁判上取消サレタル權原ハ時効ノ爲メニ有益ナラス

第四百十三條 前主ノ占有ヲ其相續人及ヒ包括若クハ特定ノ承繼人ノ占有ニ併合シ又ハ繼續スルコトハ財産編第九十二條ニ於テ之ヲ規定ス

第六章 動産ノ取得時効

第四百十四條 正權原且善意ニテ有體動産物ノ占有ヲ取得スル者ハ即時ニ時効ノ利益ヲ得但第三百三十四條及ヒ第三百三十五條ニ記載シタルモノヲ妨ケス

此場合ニ於テ反對カ證セラレサルキハ占有者ハ正權原且善意ニテ占有スルモノトノ推定ヲ受ク

第四百十五條 動産物ノ占有者カ正權原ヲ有シ且善意ナル場合ニ於テモ其物カ所有者ノ盜取セラレタルモノ又ハ遺失シタルモノナルキハ其所有者ハ盜難又ハ遺失ノ時ヨリ二個年間ハ占有者ニ對シテ其物ノ回復ヲ請求スルヲ得但占有者カ其物ヲ有償ニテ受ケタルキハ其讓渡人ニ對スル求償ヲ妨ケス

背信ニ因リテ隱匿シ又ハ詐欺ヲ以テ得タル物ニハ本條ヲ適

用セスシテ前條ノ規定ニ從フ

第四百十六條 盜取セラレ又ハ遺失シタル物ヲ競賣又ハ公ノ

市場ニ於テ又ハ此類ノ物ノ商人若クハ古物商人ヨリ善意ニテ買受ケタル者アルキハ所有者ハ其買受代價ヲ辨償スルニ非サレハ回復ヲ爲スヲ得ス

此場合ニ於テハ右ノ代價ニ付キ所有者ハ賣主ニ對シ又賣主ハ讓渡人ニ對シテ求償權ヲ有シ終ニ盜取者又ハ拾得者ニ遡ル

第四百十七條 無記名債權證書ヲ盜取セラレ又ハ遺失シタル場合ニ於テ其證書回復ノ期間及ヒ條件ハ特別ノ規則ヲ以テ之ヲ定ム

第四百十八條 前記ノ場合ニ於テ回復者カ占有ノ無權原タリ又ハ惡意タルヲ證スルキハ時効ハ三十個年ヲ經過スルニ

非サレハ成就セス

第四百十九條 前記ノ規定ハ用方ニ因リテ不動産ト爲リタル
動産カ其附着シタル不動産ヨリ分離セラレタル場合ニ於テ
ハ其動産ニ之ヲ適用ス

前記ノ規定ハ財産編第十二條ニ從ヒ用方ニ因ル動産ニ之ヲ
適用セス但其物カ土地ヨリ分離シタルキハ此限ニ在ラス
又前記ノ規定ハ記名債權ニモ包括動産ニモ之ヲ適用セス但
此等ノ物ニ關スル時効ノ期間ハ第三百三十八條以下ニ記載シ
タル區別ニ從ヒ不動産ニ關スルモノト同一ナリ

第七章 免責時効

第五百十條 義務ノ免責時効ハ債權者カ其權利ヲ行フヲ得
ヘキ時ヨリ三十年間之ヲ行ハサルニ因リテ成就ス但法律
上別段短キ期間ヲ定メ又ハ債權ヲ時効ニ罹ラサルモノト定

メタルキハ此限ニ在ラス

第五百十一條 債務ノ元本カ年賦ニテ辨済ス可キモノタルキ
ハ利息ヲ包含スルト否トヲ問ハス時効ハ各年賦ノ要求期ニ
達シタル時ヨリ各別ニ之ヲ算ス

第五百十二條 債權カ無期又ハ終身ノ年金權ナルキト雖モ其
時効ハ證書ノ日附ヨリ三十年ヲ以テ成就ス
然レモ右ノ日附ヨリ二十八年ノ後ニ至リ債權者ハ債務者
ニ對シ時効ヲ中斷スル爲メ雙方ノ費用ヲ以テ其權利ノ追認
證書ヲ得ント要求スルヲ得

若シ債務者右ノ要求ヲ拒絶シ債權者裁判上自己ノ權利ヲ追
認セシムル必要アルキハ其費用ハ全ク債務者ノ負擔タリ
第五百十三條 動産質又ハ不動産質ノ返還ヲ得ル爲メノ對人
訴權ハ適法ナル方法ニ因リテ債務ノ消滅シタル後ニ非サレ

ハ時効ニ罹ラス

第八章 特別ノ時効

第五百十四條 人ノ身分ニ關スル訴權ハ法律カ其行使ヲ特別

ノ期間ニ繫ラシムル場合ニ非サレハ時効ニ罹ラス

第五百十五條 相續人又ハ包括權原ノ受遺者若クハ受贈者ノ

分限ヲシテ効用ヲ致サシムル爲メノ遺產請求ノ訴權ハ相續

人又ハ包括權原ノ受贈者若クハ受遺者ノ權原ニテ占有スル

者ニ對シテハ相續ノ時ヨリ三十个年ヲ經過スルニ非サレハ

時効ニ罹ラス

第五百十六條 免責時効ハ左ニ掲クル諸件ノ辨濟ノ訴權ニ對

シテハ五个年トス

第一 明確ナル金額ノ填補又ハ遲延ノ利息

第二 無期又ハ終身ノ年金權ノ年金

第三 養料又ハ恩給ノ一期ノ支拂金

第四 借家賃又ハ借地賃

第五 果實又ハ日用品ノ每期ノ給與額

第六 教師、番頭、手代、使用人、僕婢、乳母ノ謝金又ハ給料ニシ

テ一个年毎ニ定メラレタルモノ

此他一般ニ一个年毎ニ又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メタ

ル金額又ハ有價物ニ係ル債務ニ付テモ亦同シ但其辨濟

ノ方法如何ニ拘ハラズ且下ニ規定シタル場合ハ此限ニ

在ラス

第一百五十七條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ三个年トス

第一 醫師、產婆、藥劑者ノ治術、世話及ヒ調劑ニ關スル其訴

權

第二 前條第六號ニ指定シタル教師、使用人其他ノ者ノ謝

金又ハ給料カ一年ヨリ短ク一个月ヨリ長キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テハ其訴權

第三 技師、工匠、測量師、製圖師ノ經畫意見及ヒ工事ニ關スル訴權

第四 不動産ニ關スル築造、地均其他ノ工作ニ付テノ請負人ノ訴權

第百五十八條 公證人、辯護士、執達吏其他ノ公吏カ職務ニ關シテ受ク可キモノニ付テノ其訴權ニ對スル時効ハ二个月トス此場合ニ於テ時効ハ右各人ノ債權ヲ生セシメタル行爲又ハ訴訟ノ終了後ニ非サレハ進行ヲ始メス然レモ終了セサル事件ニ關シテハ右各人ハ五十年餘ニ遡ル行爲ノ爲メニ謝金ヲ要求スルヲ得ス此規定ハ右各人カ其職務ノ爲メニ爲シタル立替金及ヒ支出

金ニ之ヲ適用ス

第百五十九條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ一年トス

第一 非商人ニ爲シタル供給ニ關スル日用品、衣服其他動

產物ノ卸賣商人又ハ小賣商人ノ訴權但商人又ハ工業人

ニ爲シタル供給ト雖モ其者ノ商業又ハ工業ニ關セサル

場合ニ於テハ亦同シ

第二 前記ノ區別ヲ以テ注文者ノ材料又ハ動產物ニ付キ

仕事ヲ爲ス居職ノ職工又ハ製造人ノ訴權

第三 生徒又ハ習業者ノ教育、衣食及ヒ止宿ノ代料ニ關ス

ル校長、塾主、師匠又ハ親方ノ訴權

第百六十條 時効ハ左ノ訴權ニ對シテハ六个月トス

第一 第百五十六條第六號及ヒ第百五十七條第二號ニ指定シタル教師、使用人、僕婢其他ノ者ノ謝金又ハ給料カ一

本月又ハ更ニ短キ時期ヲ以テ定メラレタル場合ニ於テ
 ハ其訴權
 第二 旅店又ハ料理店ノ主人ヨリ供給シタル宿泊料、飲食
 料及ヒ消費物ニ關スル其訴權
 第三 日雇、月雇ノ職工又ハ勞力者ノ給料及ヒ其仕事ニ際
 シ此等ノ者ノ爲シタル些少ノ供給ニ關スル其訴權
 第六十一條 前五條ニ規定シタル時効ハ現實ニ辨濟セサリ
 シヲテ自白シタル債務者之ヲ援用スルヲ得ス
 第六十二條 裁判所書記、辯護士ハ裁判ノ時ヨリ公證人ハ證
 書録製ノ時ヨリ執達吏ハ其職務執行ノ時ヨリ三ヶ年ノ後ハ
 其職務ノ事件ニ關シテ交付セラレタル書類ニ付キ責任ヲ免
 カレ其書類返還ノ證ヲ提示スル義務ヲ免除セラル
 第六十三條 本章ニ規定シタル時効ハ當事者ノ間ニ明確ナ

ル計算書、數額ヲ記載シタル債務ノ追認書又ハ債務者ニ對ス
 ル判決書アルキハ之ヲ適用スルヲ得ス此場合ニ於テハ時
 効ハ三十ヶ年トス

附則

第六十四條 本法實施ノ當時ニ於テ進行中ナル時効ハ上ニ
 定メタル條件、禁止、中斷及ヒ停止ニ從フ
 其期間ニ關シテハ舊時効カ新時効ヨリ一層長キ期間ヲ要ス
 ル場合ニ於テハ占有者又ハ債務者ハ本法實施ノ時ヨリ算シ
 テ舊時効ノ經過ス可キ殘期カ新時効ノ期間ヨリ短キキハ舊
 時効ヲ利スルヲ得
 新時効ヨリ一層短キ期間ノ舊時効ニ關シテハ其期間ハ本法
 ニ定メタルモノニ等シキ期間ニ達スル様之ヲ延長ス可シ

一、...
二、...
三、...
四、...
五、...
六、...
七、...
八、...
九、...
十、...
十一、...
十二、...
十三、...
十四、...
十五、...
十六、...
十七、...
十八、...
十九、...
二十、...
二十一、...
二十二、...
二十三、...
二十四、...
二十五、...
二十六、...
二十七、...
二十八、...
二十九、...
三十、...
三十一、...
三十二、...
三十三、...
三十四、...
三十五、...
三十六、...
三十七、...
三十八、...
三十九、...
四十、...
四十一、...
四十二、...
四十三、...
四十四、...
四十五、...
四十六、...
四十七、...
四十八、...
四十九、...
五十、...

